西南学院大学　人間科学論集　第 15 巻　第 2 号　　255 ― 291 頁　2020 年 2 月

自閉症の子どもとの出会いから五十年

― 私の臨床、研究、教育の歩み ―

小　林　隆　児

Fifty Years Since I Met with Children with Autism

Ryuji Kobayashi

2020（令和 2）年春、定年退職を迎えるにあたり、45 年間の教員生活の歩みを振り返った。25 歳で精神科医として大学教員となり、以後様々な大学を転々としながらも一貫して大学教員生活を送ることができた。これまでに経験した領域は、（精神科）医療に始まり、その後（障碍）教育、社会福祉、臨床心理、など多岐に及んだ。最初の頃、私は臨床と研究にエネルギーの多くを費やしたが、次第に教育の重要性に目覚め、本学での 8 年間の教員生活ではその手応えを次第に感じるようになった。そこで私が見出した教育法は、感性を蘇らせることに焦点を当てた「感性教育」であった。私の主たる教育目標は優れた（こころの）臨床家の養成にあるが、そのためには「感性を磨く」ことが今切実に求められていると強く思ったからである。

なお、私の臨床と研究の生活は自閉症の子どもたちとの出会いに始まったが、それは医学生時代二十歳になったばかりの時であった。それから数えてちょうど五十年の節目となる。タイトルを「五十年」としたのはそのためである。

はじめに

早いものであと残すところ数ヶ月で大学教員生活も終わりとなった。1975（昭 50）年春、九州大学医学部を卒業し、精神科医となったが、その後は一貫して自閉症をはじめとする発達障碍の臨床と研究に従事しながら、精神医学、

障碍児教育、社会福祉、心理臨床など、様々な領域を渡り歩いてきた。ちょうど45年になる。

私が自閉症の子どもたちと出会ったのは、医学生として二十歳になったばかりの頃で、自閉症療育ボランティア活動「土曜学級」[1] に参加した時であった。以来、自閉症の子どもたちと関わり合いを続けてきた。それから数えるとちょうど50年である。この半世紀、私が自閉症の子どもたちと関わり合いながら、どのような臨床、研究、教育の道を歩んできたか、当時の思いを振り返りながらつれづれに述べてみたい。

Ⅰ．幼少期から大学入学まで（1949.10-1968.3）

1949（昭24）年、鳥取県西部の米子市という人口十万に満たない小都市に生まれた私は、18歳になるまで故郷から出ることもなく、地元で生活を送っていた。元城下町で商売の盛んな土地柄だった。外者にも解放的で自由な雰囲気があった。

私が生まれたとき、両親は菓子製造業に従事していた。菓子といっても和菓子ではなく、庶民の味である駄菓子専門であった。両親二人だけの細々とした家内工業で、工場は住居を兼ねていたので、私はいつも菓子をつくる両親の姿を見ながらの生活を送っていた。汗水垂らして働く両親の姿がいつも目の前にあった。戦後間もない、食べ物にも困る時代であった。菓子はよく売れた。目の前にいつも菓子があったので、当時の子どもにしては珍しくおやつには事欠かなかった。お腹がすけば両親の作っている菓子をもらえたので、ひもじい思いをした記憶はあまりない。近所の子どもたちと遊ぶとき、周りからいつも羨ましがられていた。そんなこともあって、私は学校が終わって近所の仲間と遊ぶ時、あるいは塾（小学校低学年では書道、高学年になって珠算）に通う時、必ずわが家の菓子をこっそり手にして出かけたものである。すると、まわりの子どもたちに喜ばれた。今振り返ると、近所のボスという存在の仲間に入れてもらう時には、媚びるような心理が多少なりとも働いていたのではないか。江戸時代で言えば家来が殿様に自慢の品を献上するといった感じと言えばよかろうか。

小学生時代、私がもっとも熱中したのは、近所の算盤塾で習った珠算で、ついで中学校時代の部活動での計算尺だった。

珠算は小学４年から始めたが、すぐにめきめき上達した。上達するとすぐに結果として現れるので、それが面白くて仕方なかった。

珠算には、紙に印刷されている数列を上から下に読み取りながら算盤を使って素早く計算する「見取り算」と、教師が数字を読み上げるのを聞きながら算盤で計算する「読み上げ算」が代表的なものだが、特に私は暗算が好きになった。教師が読み上げる数字を聞きながら、頭のなかに描いた算盤を手で弾くようにして計算するというものである。当時から今でも変わらないが、私の脳裏にはいつも算盤が思い浮かんでいた。小学六年になると、珠算、暗算の部門で参段の免状を取得した（**図１**）。

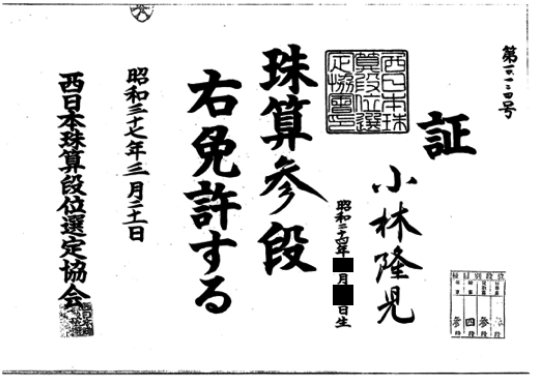

第○○○号
証
小林隆見
昭和○○年■月■日生
珠算参段
右免許する
昭和三七年三月三十日
西日本珠算段位選定協会

図１：珠算参段の免状

田舎ではあったが、鳥取県の珠算大会小学生部門で表彰状と賞品（主にノートなどの文房具）を持ち帰っては母親の喜ぶ顔を見るのが楽しみだったのを今でもよく記憶している。

計算尺は当時の工業高校の生徒にとっては必須の計算ツールであったが、なぜか私が通った中学校に計算尺部があった。珠算の延長で、私は計算尺にも興味を覚え、すぐに入部したが、ここでも私はすぐに没頭した。その成果はすぐに出た。中学２年と３年のとき、鳥取県の代表として全国大会に出場した。周

囲は工業系の高校生ばかりだった。そのなかに中学生の私が混じっていた。会場は日大駿河台校舎だった。残念ながら全国大会では高校生にまったく歯が立たなかった。

私が医師を志すようになったのは中学生のときだったように思う。当時、学校の図書室に行っては有名な伝記を片っ端から読み漁っていた。エジソン、キューリー夫人、野口英世、二宮尊徳などなど。そのなかにシュヴァイツァーの本があった。理由は定かではないが、なぜかそれが医者に憧れるきっかけとなった。

当時の記憶で今でも忘れられない出来事がある。小学校の図書室にテレビが置かれていた。昼間放映されていたが、ある日（1960（昭 35）年 10 月）社会党の浅沼委員長が壇上で暴漢に襲われて刺殺されるというニュースが演説の中継画面とともに流れていたのを鮮明に記憶している。世の中にこんな恐ろしいことがあるのだと子どもながらに感じたものである。当時小学 5 年生だった。60 年安保闘争で日本全国が揺れ動いていた時期である。

高校生活は医学部に入るために悲壮な決意で受験勉強の日々を送ることになった。山陰の高校生の多くは関西方面の大学に行く者が多かったが、当時九州大学工学部在学中であった兄の影響で九州大学を目指した。今振り返ると、ガリ勉そのもので、英語と数学の塾に通いながら、来る日も来る日も勉強どっぶりの毎日であった。当時の学生証の写真を見ると、気難しい表情をして、ノイローゼ気味の相貌であった。

念願叶って現役で合格したが、合格発表の時、自宅でひとり階段に腰掛けて、ラジオを耳に当て、深夜の短波放送をドキドキしながら聞いていた姿は今でもありありと思い浮かび、忘れることはできない。

Ⅱ．医学部の学生時代（1968.4-1975.3）

1．入学当初の記憶

医学部に入学したのは 1968（昭 43）年春。その年 1 月には佐世保にアメリカの原子力空母エンタープライズが入港するということで、全国の学生運動家たちが一斉に佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争に立ち上がっていた。九州

大学（当時の教養部で六本松にあった）は学生運動家たちが全国から結集する際の格好の集合場所となった。

このような緊迫した時代に入学した私は、そうした雰囲気の中で自分なりにどう対処したらよいか、下宿の仲間やクラブ活動の仲間たちと日夜、安い焼酎「白波」を飲みながらも真剣に語り合っていた。哲学などの本を読む勉強会も始めた。とても落ち着いて大学の講義を聴講する気分にはなれず、キャンパスではいつもアジ演説が流れていて、緊迫した雰囲気だった。

入学してまもない６月２日夜、仲間といつものように焼酎で酒盛りしながら議論をしていた時、九州大学箱崎キャンパスに建設中の九州大学大型計算機センターに、アメリカ空軍ファントム偵察機が墜落するという大事故の知らせが飛び込んできた。その時いた仲間とすぐに現地に駆けつけ、あっという間にデモの隊列に加わり、「安保反対！」「安保粉砕！」のシュプレヒコールを大声で繰り返し叫んだものである。

教養部の講義に出席する気にもなれず悶々とした生活を送っていた。大学の近くに下宿していたが、そこで一緒に入学した仲間もいて、毎晩のように飲み語り合ったものである。

専門課程に進んで間も無く私は医学部の講義を休みがちになり、勉強意欲がまったく起こらなくなった。自分が何を目標に生きていけばよいのかわからなくなった。文字通り同一性拡散状態に陥ってしまった。ついに１年間休学することにした。医者の道を進むことにも迷いが生じていた。その頃、心配した母が兄と一緒に私の下宿に来て、退学するのだけは止めるように懇願した。私はそれで踏みとどまった。自暴自棄にならずに済んだ。今では母に感謝している。大学でも卒業するまでに１年遅れをとることがどんなに大変なことか身に沁みた。仲間はずれの心境であった。不登校の子どもたちの気持ちが少しはわかったような気がしたものである。

さすがに無為な生活を送ってばかりではダメだと思い、周りの友人の誘いで邦楽部に入部した。尺八や琴で演奏する日本音楽の邦楽である。邦楽部では古典には飽き足らず、現代邦楽を取り上げて練習に励んでいた。そのような先進的な取り組みが気に入ったのか、私は尺八演奏の稽古にも日夜没頭した。とに

かく何かに没頭するものが欲しかったのではないかと思う。毎年のように定期演奏会を開催するようになった。ある年の定期演奏会が福岡市西区（今の早良区）のももちパレスの大ホールで開催されたが、そこで尺八独奏曲「詩曲」を一人で演奏した。私にとって数少ない晴れ姿であった。

2．自閉症療育ボランティア活動「土曜学級」と療育キャンプ

大学生時代には自分の一生を決める出会いが必ずあるものだ。教養部２年の頃、邦楽部のある友人から九州大学病院で自閉症の子どもたちを療育するボランティア活動「土曜学級」[1] が行われていると聞き、早速私は顔を出してみた。それが二十歳の誕生日を迎えて間もない頃であった。私はすぐにその活動の魅力に惹かれるとともに、自閉症というなんともいえない不可解なこころの病に引き込まれていった。私の一生を決めた出会いの瞬間である。

私は医学の世界でやっと情熱を傾ける対象を見つけたことで、「土曜学級」の活動に没頭するようになった。最初は子どもを担当していたが、なぜか私が担当した子どもの母親が交通事故で死亡したり離婚したりするという不幸な出来事が幾度か重なった。そこで私は子どもを担当する役割に代わって集団遊戯をリードする役割を担当することになった（**図 2**）。次第に組織を動かす役割を担うようになってから、「土曜学級」の運営にますます深入りするようになった。

図 2：1975 年春、屋外での「土曜学級」活動の 1 コマ
（中央で遊戯をリードしているのが筆者）

当時、「土曜学級」は土曜日の午後、九州大学医学部付属病院精神科外来の一角で行われていたが、精神科外来に顔を出しては、精神科医の働きぶりを横目で眺めていた。当時の精神神経医学教室（中尾弘之主任教授）の精神病理研究室には、池田数好、西園昌久、村田豊久、神田橋條治、山上敏子など、今考えると信じられないほどの錚々たる面々が顔を連ねていた。私は学生時代からそんな先輩たちの働く姿を垣間見ながらボランティア活動に熱中していた。このことはのちのちの私に大きな影響を及ぼすことになった。

当時はまだ自閉症についてよくわからない時代で、ボランティア活動の指導的役割を担っていた恩師村田豊久先生を中心に、みんなで勉強しながらの試行錯誤の連続で、子どもたちに接していた。

そんな子どもたちは九州全域にたくさんいた。「土曜学級」の活動は九州のみならず全国でも注目されていた。翌（1970）年 8 月、池田数好先生（当時、九州大学学長）や村田豊久先生の尽力により、朝日新聞西部厚生文化事業団の主催で、年 1 回の朝日自閉症療育キャンプが開催されることになった。会場は第 2 回まで福岡県の八木山高原（**図 3**）で、第 3 回（**図 4**）から大分県の飯田高原で行われるようになった。1989 年まで 20 年間続いた（**図 5**）。第 11 回から 10 年間私はキャンプ長を務め、全体の運営に携わることができた（**図 6**）。

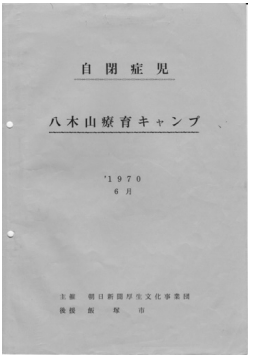


図 3：第 1 回八木山療育キャンプのパンフレット表紙

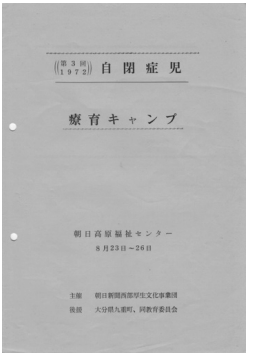


図 4：第 3 回療育キャンプ（大分県飯田高原で開催）のパンフレット表紙

図 5：第 20 回療育キャンプ（最終回）のパンフレット表紙

図 6：1973 年夏の九重朝日自閉症療育キャンプの 1 コマ
（左端が筆者）

そのおかげで、九州山口地区の多くの自閉症の子どもたちとその家族に接する機会を持てた。このことが、のちのち精神科医になってからの私の研究テーマである自閉症児追跡調査研究につながっていくことになる。

3．精神科医になるまでの迷い

この時の自閉症の子どもたちとの出会いが私の人生を決定的なものにした。ただ、私には悩みがあった。何科の医師になるかという問題に直面していたからである。

卒業する少し前には小児科医になろうか、精神科医になろうか、真剣に悩んだ時期もあったが、当時九州大学精神科講師であった山上敏子先生（のちに行動療法の大家となる精神科医）に昼食をご馳走になりながら相談したところ「小林君は小児科が向いているんじゃないの。だってちょっと神経質だから。精神科だと苦労するんじゃないかな」との助言をもらった記憶がある。そのため小児科医になろうかと随分と悩んだが、最終的には、自閉症のボランティア活動の中心的指導者であった村田豊久先生（のちに九州大学教授、西南学院大学教授などを歴任）が助教授として着任された福岡大学医学部精神医学教室に入局することに決めた。

正直なところを言えば、最初は九州大学医学部精神神経科教室に入ろうかとの思いもあり、当時の精神科の主任教授中尾弘之氏を訪問したが、「君は（学

生運動家の）ブラックリストに上がっているから入局は無理だね」と言われて断念した。結果的にはこれが幸いした。もしも九州大学に入局していたならば、すぐに方々の医療機関に出向に出され、自分の好きな領域を極めることはできなかったと思う。人生はわからないものである。

Ⅲ．福岡大学時代（1975.6-1988.3）

1．自閉症療育キャンプの実践と効果の検証

精神科医になってからの私の臨床と研究の中心的テーマは必然的に自閉症の子どもたちになった。学生時代から顔なじみの子どもたちが病院に通ってくるとき、私は主治医の村田豊久先生の外来診療の陪席を率先して担当するようになった。そこで私は村田豊久先生の子どもと家族との面接でのやりとりを、何年にも渡ってつぶさに観察するという貴重な経験を持つことができた。福岡大学に在籍している期間ずっと続けた。このことは私が精神科医として生きていく上で最大の財産となった。

私の処女（原著）論文は自閉症児の療育キャンプに関するものとなったが、研究を論文にまとめるという初めての作業はなかなかの難物で苦労した。結局私が書いた草稿は村田豊久先生の指導のもと、ほぼ全面的に書き直されるという苦い経験をした。それでも村田先生は私を筆頭執筆者にしてくださり、児童精神医学専門の全国誌に投稿した。そして無事受理され掲載となった[2)]。この論文は和文ではあったが、英文抄録もあったためか、世界中から論文別刷の送付依頼の葉書が舞い込んで、その反響の大きさに驚くとともに、論文を書く楽しさと喜びを味わうことができた。この体験はその後の私にとって論文を書くことへの意欲を掻き立ててくれる契機になった。

2．事例報告の処女論文

その２年後、初めて事例研究の論文[3)]を書いた。村田先生の外来を受診した中学生の男児が入院した際に、私が主治医を担当し、病棟での治療経験をまとめたものである。最近、その論文を改めて読み直し、自閉症の子どもに対する私の着眼点が今の自分と繋がっていることに改めて気づかされた。いかに若い

頃の経験とその時の着眼点が重要かを再認識したものである[4)]。

3．自閉症の言語、認知構造からみた精神病理学的検討

私が精神科医になる前は自閉症の原因論として母原病説が主流であったが、精神科医になった頃にはラターの言語認知障碍仮説が台頭し始めていた。私にはどうにも馴染めない仮説であったが、それを検証するためにはどうしても自閉症の子どもたちの言語認知構造を何らかの形で検査をしなければならないと考えた。

私の妻が言語聴覚士で失語症の臨床と研究に従事していたことから、標準失語症検査（SLTA）という検査法があることを知った。そこで早速自閉症の年長児を対象に SLTA を用いて彼らの言語認知構造を調べ、日本児童精神医学会の学会誌に投稿し受理された[5)]。この中で私は「自閉症は厳密な意味での言語認知障碍と考えるより、もっと基本的な対人認知障碍を持っていることが推定され、自己と外界の弁別の認知能力の障碍による自我統合能力の問題が基盤にあるのではないか」と推論を交えて主張した。当時、自閉症の言語認知障碍仮説が広がり始め、多くの研究者が雪崩を打ってその説に傾倒していった時期であったが、控えめながらもそれに対する批判的な論文である。

その関連で自閉症の認知障碍の特徴を、投影法心理検査である幼児・児童絵画統覚検査（CAT 日本版）[6)] と主題統覚検査（TAT）[7)] を用いて調査した。自閉症の子どもたちを相手に心理検査を介してコミュニケーションを取ったが、この時の彼らの独特な反応を知ったことが後々の私の自閉症理解を深める上での大きなヒントとなった。

これら三つの研究で私は「自閉症の中核的問題は自我機能の発達の脆弱性にあり、その結果他者からの回避傾向や関係念慮に発展しやすい精神病理学的特徴を持つ」ことを確かな手応えを持って確認することができた。精神病理学の視点に関心を持つようになった論文であった。

今振り返ると、私には当時の主流をなす考えを素直に受け入れないという「あまのじゃく」な心性が強かったのではないかと思えてくる。そんな意味でもこれら三つの論文は私のお気に入りである。

4．90 例の自閉症の精神発達過程に関する研究

学生時代に出会った自閉症の子どもたちも多かったため、多くの子どもたちの成長発達過程を直接観察することができた。それが私の研究として次第に結実していく。

長年彼らと付き合っていく中で、両親が事故や病気で亡くなるという悲しい知らせを耳にするようになったが、そこで私は驚きの体験を持つことになる。手放しでは喜べないことではあったが、親の死を契機に、それ以前よりも精神的にしっかりしてきて、逞しくなるという変化が子どもたちに起こってきたことである。このような変化がなぜ起こるのか。私には親の死を契機に彼らの心理的自立が生まれたのだと思われたのである。また学校生活では問題行動で大変だった子どもたちの多くが就労してから見違えるように立派になっていく姿を幾度となく確認することができた[8)]。

彼らの成長発達過程でのこのような顕著な変化は、当時主流をなしていた言語認知障碍仮説では到底理解できない重要な知見であると確信した私は 12 歳以上の思春期に達した 90 例の幼児期からの発達過程をつぶさに纏め、「自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究」として日本の精神医学関係の最大の学会誌に受理された[9)]。これが私の学位論文となった。

私はこの研究を国際学会でぜひとも発表しなければと考え、1986 年 7 月パリで開催された第 11 回国際児童青年精神医学会（IACAPAP）で村田先生と一緒に参加し発表した[10-12)]。国際学会での発表は初めての体験であった。その時の質疑応答で気づいたことだが、海外の人たちにとって幼児期から青年期・成人期まで治療的関わりを持ち続けて彼らの発達成長過程を論じることなど、信じられないものであったようである。彼らにとっては自分の関心のあるテーマに沿って研究に従事することが当然であって、私たちのように彼らと長年付き合いながら成長過程を追い続けるという地味で息の長い研究など想像さえできなかったに違いない。それほどまでに貴重な研究であった。

まもなく東京大学出版会から、熱海の温泉旅館に泊まり込みで自閉症について様々な立場から発表し討論したのち、その内容を本にするという企画のお誘いがあった。大学紛争以来、学会が学問的に機能しなかった時期、精神病理学

を牽引したことで精神医学界ではよく知られていた東京大学出版会のシリーズ『分裂病の精神病理』の自閉症版のようなものであった[13)]。

5．青年期、成人期自閉症の精神病理学的研究

その後、私は自閉症の子どもたちの成長発達過程でこれと思った貴重な臨床経験は必ず論文として世に問うことを自分に課すようになった。彼らから学んだことをそのような形で報告することで、彼らへの感謝の気持ちを表したいとの思いもあった。ただし、治療で改善が確認された事例を原則とした。

大学病院で診療をした成人期の自閉症者が、当時非常勤で働いていた民間精神科病院（福間病院）に子どもの頃にも受診していたことを知り、保管されていたカルテのデータを大いに参考にさせてもらった[14-15)]。

村田先生が子どもの頃から治療関係を持っていた自閉症の人たちの中で成人期になって混乱を来して入院治療を受けることが少なからずあったが、その際主治医などで病棟での治療に関与して貴重な経験を持った。その中の一つに、成人期のアスペルガー障碍の入院事例を仲間と報告したことがある[16)]。

その他にも、心身症[17-20)]、躁うつ病[21)]、感情障碍[22)]、強迫性障碍[23)]、摂食障碍[24)] などの事例報告がある。

彼らの発達経過を追っていく中で特に思春期・青年期の発達において自閉症独特の反応を数多く見出した。そこで青年期・成人期の自閉症に関する精神病理学的観点からいくつかの論文をまとめる[25-26)] とともに、精神性的発達をテーマにした論文も書いた[27-29)]。

6．前思春期発達病理と精神療法

自閉症研究の他にも私には興味を引いたテーマが少なからずあった。大学病院での出会いも少なくなかったが、精神科医になってから週１回民間精神科病院で働く機会を持てたため、実に多くの子どもたちとの出会いがあった。大学病院では出会えない貴重な経験も少なくない。特に私の興味を引いたのが前思春期発達の問題であった。子どもから若者へと成長する過渡的段階は人間の精神発達過程で幼少期についで波乱に富む時期である。そこでは実に多様な病態

が生じるが、治療を進めていくと、驚くほど短期間に劇的な変化を遂げることがわかった。それが面白く、次々に論文化して発表した[30-39]。このテーマでメンタルヘルス岡本記念財団から研究助成を受けた[40]、その後、全体の知見をまとめる機会も得た[41]。

7．民間精神病院の精神科医療の時代的変遷、統計

1年間だけ（1981.5-1982.4）大学病院を離れて民間精神科病院（福間病院）に常勤として出向した。当時この病院は事務機能の電算化の時期に差し掛かっていた。私は当時からコンピューターを使った仕事に興味があったので、病院創設者でもある佐々木勇之進院長と就職初日に面接した際に、病院の過去25年間のデータを電子化する作業に取り組んでみましょうかと提案した。院長は大喜びで、以後1年間、診療時間以外はすべてこの作業に精力を注ぎ込んだ。院長をはじめ病院職員も全面的に協力してくれた。さらにデータ化の単純作業には私の関係で九州大学の学生たちを多数アルバイトとして雇った。すべて院長の全面的なバックアップがあった。さらに福岡大学医学部社会医学系の電算室の吉永一彦氏との交流があったことが幸いした。彼から全面的な協力を得たからできた仕事である。

この作業は大変だったが、非常に充実感をも味わうことができた。この時私の脳裏には小学生時代に珠算に没頭していた自分の姿と重なるものを感じていた。

データがまとまると次々に学会で発表し、論文化するように心がけた[42-46]。学会は普段顔を出す子どもの学会ではなく、大人の学会であったことも新鮮であった。大阪の国際学会（世界社会精神医学会）での発表[47]の時には、発表後、院長が京都の先斗町に連れて行ってくれた。人生初めての京都の舞妓さんとの宴席を楽しんだ。懐かしい思い出である。

Ⅳ．大分大学時代（1988.4-1994.3）

私の臨床研究の基本的スタイルは事例研究であった。大分大学に移り、それまで臨床精神医学の基礎を学んだ福岡大学から距離を置くようになった。する

と事例研究の大切さがますます大きくなった。これまでにも増して一つひとつの事例から学ぶことが多くなった。

1．201 例の自閉症追跡調査研究

90 例の学位論文をまとめてまもなく私は福岡大学を離れて大分大学に新しい職を得た。少し精神的ゆとりが生まれたので、福岡大学での研究の総仕上げをしたいと思った。村田先生と私が長年付き合ってきた自閉症の子どもたちの中で 18 歳以上になった者が 200 例を越えた。そこで私は彼らの成長発達過程を纏める研究に着手した。学位論文に比べるとはるかにスケールの大きな研究となった。

私はその成果を、1990 年 7 月に京都で開催された第 12 回国際児童青年精神医学会（IACAPAP）で再び村田先生と一緒に 201 例の自閉症追跡調査結果として報告した。国内誌ではすでに発表していたが[48]、この研究はぜひとも権威ある国際誌に発表しなければと意を決して取り組み、自閉症研究では一流の Journal of Autism and Developmental Disorders に投稿し、数回の査読を経て無事掲載された[49]。掲載の知らせを受け取った時の感激は今でも忘れられないが、それ以上に嬉しかったのは、その後間もなくある国際学会で自閉症研究の権威として著名なマイケル・ラターが特別講演で私たちの研究を大きく引用し評価してくれたことであった。その後、自閉症の転帰や追跡調査研究では必ず引用されるようになった。従来の自閉症の転帰が大幅に塗り替えられたこともあるが、調査対象が 201 例と膨大な数であったことも大きかった。

この時の調査結果には他にも貴重な内容を含んでいたので、いくつかの和文[50-51]と英文[52-53]の論文として投稿し、全て無事受理された。

2．独自の発達精神病理的視点の獲得

この時期「関係」の重要性に着目する数多くの貴重な経験を持った。その中でも鯨岡峻氏との出会いは大きかった。25 年ほど前のことである。当時教鞭をとっていた大分大学に集中講義で氏をお招きし、夜は温泉とふぐをともにしながら大いに語り合った。その場で私が日頃の臨床での問題意識を投げかけた時、氏から発達心理学者ウェルナーの「相貌的知覚」（**図 7**）（ウェルナー著、

鯨岡峻・浜田寿美男訳『発達心理学入門』ミネルヴァ書房）という概念を教えてもらった。当時私が温めていた幾多の臨床経験は、それをきっかけにして火花を起こし繋がっていくのを実感し、知的興奮を味わっていた。その口火を切ったのが「自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理」である[54]。以後、次々に論文化した[55-58]。この時期は原著論文ばかり書いていて、研究生活上最も生産性の高い時期だった。

図７：ある女子高校生が描いた「九」君と「州」君で、相貌的知覚の特徴がよく示されている（小林、1993；Kobayashi, 1996）

これらの知見は今後の研究を考えた時、おそらく重要なものとなるとの予感があった。そのためぜひとも英文化する必要性を感じていくつか纏めることができた[59-61]。この中で特に「自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理」を英文化した時にも Journal of Autism and Developmental Disorders に投稿したが、査読で何度も修正を余儀なくされた。辛抱しながら何とか受理にこぎつけることはできた[59]。原初的知覚としての相貌的知覚は力動感 vitality affect（Daniel Stern）とともに乳幼児期早期の子どもたちの知覚体験を理解す

る上で非常に重要な概念だと私はその時強く思った[60-61]。しかし、ユダヤ人であるウェルナーは母国からアメリカに亡命してから苦労したように、今の時代はウェルナーの発達心理学は海外ではあまり受け入れられていないことを実感した。

このテーマで科研費を獲得することもできた[62]。

精神科医になった時から精神病理学という学問に強い興味関心を持っていた。心の病はなぜ起こるのかを解明する学問である。

相貌的知覚と力動感という原初的知覚の概念は、乳幼児期早期から成人期までの発達障碍を統一的に理解する上での極めて重要な概念となっていった。私の頭の中には統合失調症と自閉症との精神病理学的異同に関するテーマが常に息づいていたが、その一つの成果を間も無く形にすることができた[63]。その後、発達精神病理学的研究は私なりの発展を遂げていくことになるが[64-66]、のちのち「関係発達精神病理学」という独自な立場の主張へとつながることになる[67]。

Ⅴ．東海大学時代（1994.4-2008.3）

1．母子ユニットの創設、自閉症早期診断、早期治療、予防

大分大学時代に自閉症に相貌的知覚の現象を認めたことによって、私は自閉症の早期治療の可能性を強く意識するようになった。原初的知覚優位な発達時期に原初的コミュニケーションの質を検討することによって、早期治療さらには予防の道が見えてくるのではないかとの感触を持ち始めていた。大分大学時代にゼミの学生たちと細々と始めていたが[68]、新しい職場でしっかりとした環境を作ってぜひとも実施したいとの思いが強くなった。

そんな最中に関東の大学に来ないかとの声をある人から掛けてもらう幸運を得た。さらに幸いしたのは、それが東海大学の医学部に隣接した新設学部（健康科学部）の準備室だったことである。精神科の臨床を行いながら、新しい環境で仕事ができることは私にとって新たな可能性を切り開いてくれそうな予感があった。長年の夢であった自分の臨床研究施設を作ることができた。それが母子ユニット（Mother-Infant Unit）である（**図 8、9、10**）。そこで私は本格的

に乳幼児期の母子に対する「関係」臨床を開始した。当時はまだ国内景気も悪くなかったので、かなり贅沢な環境を作ることができたことはとても幸いした。

社会福祉学科に在籍していたが、私は自分の大学で学生に生きた臨床教育ができることにも大きな可能性を感じていた。ただし、医学部の病院とは異なり、私がすべての運営をしなければならなかったため、助手の協力を得ても週１回が限界であった。大学病院精神科外来で診療の機会も得ることができたので、そこで MIU での治療に適用できる事例を紹介した。MIU の存在が周囲に知れ

図 8：母子ユニットの入口ドアにかけられた看板

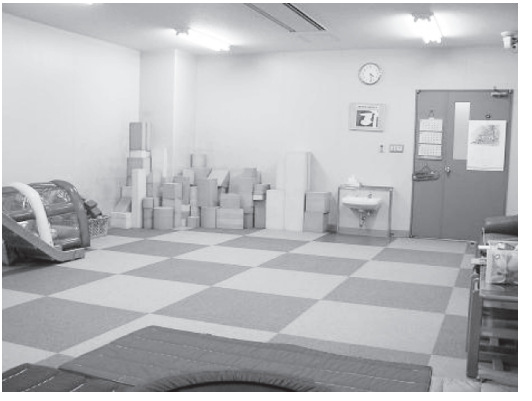


図 9：母子ユニットの遊戯療法室（58m^2）

図 10：母子ユニットの監察室（34m²）
（モニターカメラ、カメラ調整盤など）

渡るに連れ、紹介事例も増えていった。乳児から幼児まで、就学前の子どもたちに限って MIU での治療を積み重ねていった。

在籍した 14 年間で関与した母子例は 81 組に及び、その中でアタッチメント・パターンの評価法としてよく知られていた新奇場面法（Strange Situation Procedure）を適用して母子関係を観察した事例も計 55 例になった。

開始した頃、MIU の運営はすべて私ひとりで行わなければならず大変だったが、仕事仲間の協力や学生たちの参加によって次第に楽になった。自分の思い通りにできるという幸運な時期でもあった。

この時期、栗田廣氏（東京大学教授）からのお誘いで厚生省精神・神経疾患研究班に加えてもらえたことが[69-75]、私の研究に弾みをつけてくれた。この時期から MIU の運営費捻出のために外部資金の獲得にも力を入れるようになった[76-77]。厚生科学研究のお誘い[78-80] をいただくようになり、研究活動はさらに活発になった。

今振り返ると、当時はまだ「関係」をみるとはどういうことか、その核心はつかめず、つぎつぎに相談に訪れる親子を丁寧にみることだけに忙殺されていた。毎週金曜日 1 時間刻みで多い時には計 8 例見た後、夜 3 時間にわたってその日の臨床をビデオで振り返りながら議論を積み重ねた。

次々に新しい知見を得るとともに、仲間と学会発表を続けた。論文化することができるようになったのはMIU創設から3年経過してからであった[81-82]。その後も着実に研究を論文化していくことができた[83-90]。

九州時代には本を書くことは随分とハードルの高いものだと思っていたが、東京に出ていったことで、勇気を奮って自閉症研究で著名な中根晃氏にある出版社の編集者を紹介してもらった。まず手始めとして九州時代の仕事を纏めて本にすることを考えた。それが最初の単著『自閉症の発達精神病理と治療』である[91]。ただ、本書は過去の論文を編んだもので、それまでの私の仕事のけじめのつもりであった。

一冊の本を書くことの大変さと同時に充実感を味わうことができたことで弾みがついた。早速MIUでの研究を書き下ろしてみたくなった。最初の書き下ろしの単著が『自閉症の関係障害臨床－母と子のあいだを治療する－』である[92]。

MIUの活動で次々に新たな知見を得てとても充実した月日であった。仲間とともに、毎年のようにして年間10回前後も学会発表するほどになった。しかし、まもなく私たちの研究発表に対してある特定の人物からいつも学会で執拗なバッシングを受けるようになった。とても批判などといえるような代物ではなかった。私たちの研究のキーワードは母子「関係」であったため、自閉症原因論としての母原病の再来だと誹りである。当時、そのように短絡的に考える者は少なくなかったのであろう。恐ろしいことにその場にいた学会員誰一人私たちを擁護する者はいなかった。さすがにこれは私にも随分と堪えた。2004年を境にそれまで行なっていた学会発表を一切止めた。私の研究者生命の危機であった。以来、私は学会での口頭発表はやめて、紙媒体で自説を主張しようと決め、論文を書くか、著書を書き下ろすことに目標を据えた。結果的にこれで私は研究者として腰を据えて仕事に取り組むことができた。

私の頭には乳幼児期と成人期が有機的に連関するようになり、それを繋ぐべく毎年のように本を書き下ろすようになった。その最初の本が『自閉症とことばの成り立ち』[93]である。

2．自閉症の行動障碍に関する臨床研究

母子ユニットで乳児から幼児までの子どもたちを観察治療していた私にとってとても幸運だったのは、当時静岡県御殿場市に設立された自閉症者入所施設「さつき学園」から嘱託医として協力の要請がきたことであった。青年期・成人期の自閉症者たちの生き様に直接触れる機会が与えられたことによって、私は自閉症の乳児から成人に至る全成長過程を直接この目で観察できるとともに、仲間の協力も得ながら治療に取り組むことができる環境が整ったことになる。今更ながら恵まれた環境だったと感謝してもしきれないものがある。

月に2回午後から出向き、全ての入所者を毎回両親同席のもとに私が面接し、その後、職員から施設内での取り組みの報告を聞きながら、ともに議論するというカンファレンスを蓄積して行った。その成果は着実に蓄積していくとともに、仲間とともに学会で発表を重ねた。

この間、当時自閉症協会会長石井哲夫氏から厚生省心身障害研究班にも加えていただいた[94]が、他にも富士記念財団[95]や三菱記念財団[96-97]、科研費[98]から助成を受けた。行動障碍をテーマに単著[99]と共著[100]を出版することができた。

3．講座とセミナーの全国展開

学生時代から自閉症の療育キャンプの運営に従事していた経験から、私は多くの人の力を結集して何かを企画することの面白さを身体で学習していた。そのため、自分の中に何が手応えを掴むとすぐに世に問わねばとの思いがふつふつと湧き出る習性が身についていた。

福岡大学在職中、主任教授西園昌久氏から「精神医学という学問はBewegung（運動）だよ」とよく聞かされていた。私の心の中にこの言葉は焼き付き離れることはなかった。そのような思いが講座やセミナーの企画につながった。

1）御殿場さつき自閉症セミナー（1998-2001）**（主催：社会福祉法人ふじの郷さつき学園）**

東海大学で乳幼児期と成人期の自閉症の人々への支援を同時並行で実践する中で、私の中にその成果を世に問う仕事をしたい、そして是非ともしなければ、との思いが強くなった。「さつき学園」理事長に相談して、行動障碍の理解と対応を中心としたセミナーを企画開催しようという機運が生まれた。職員全員の協力を得ての手作りのセミナーであったが、全国から多くの参加者が集まった。以後毎年計 4 回開催した。私にとっての最初のセミナー企画の体験であった。

2）自閉症の関係発達臨床講座（2003-2007）**（主催：東海大学）**

ついで企画したのが東海大学での母子ユニットでの成果を世に問うための講座開催であった。マンモス大学の一つである東海大学にはエクステンション課が早くからできていて、毎年、市民向けに多くの講座が開催されていた。私もその中に加えていただいた。以来、年間 2 から 5 回、4 年間で計 20 回開催した。この講座のほぼ全てで私が講師を担当したが、数回鯨岡峻氏に講師をお願いした。

3）自閉症の関係発達臨床セミナー（2002-2007）**（主催：東海大学）**

講座の他にも自閉症に対する理念を共有できる仲間に声を掛けて、セミナーを開催することにした。ここでは全面的に鯨岡峻氏の協力を仰いで、毎回力になってもらった。反響が良かったことに気を良くして、全国展開（東京、北海道、九州、関西、東北、北陸）をするまでになった。5 年間で計 15 回開催した。セミナーの成果を本にすることもできた[101)]。

4．小児精神医学教育セミナー（1999-2014）

長尾圭造、奥山眞紀子、宮本信也各氏らとともに、全国の小児科医および精神科医を対象に小児精神医学の研修を目的に、小児精神医学研究会主催による小児精神医学教育セミナーを 1999 年より主に大阪市で開催。最初の 4 年間は責任企画担当者として関与。その後も担当委員会のメンバーとして毎年企画立案段階から参加し、小児精神医学領域の医師の養成に力を注いだ。

5．商業誌「そだちの科学」の編集に関与

2003年、精神医学、臨床心理学領域では最も有名な専門商業誌「こころの科学」を出版している日本評論社の編集者から「こころの科学」から枝分かれして「そだちの科学」という子どもの育ちに特化した雑誌を創刊するので力を貸して欲しいとのお誘いをいただいた。毎年2冊の定期刊行だった。学会誌の編集委員の経験はあったが、商業誌を企画編集するという仕事は初めてで、それに加えていただき、私の関心は広がっていった。2018年までの計15年間編集子を担当させてもらったが、この経験によって私の研究にも拍車がかかった。

Ⅵ．大正大学時代（2008.4-2012.3）

14年間の東海大学での生活を終え、豊島区西巣鴨にある大正大学に移った。友人からの誘いだった。せっかく九州から東京に移ったからには、一度でいいから都心で生活をしてみたいとの密かな期待もあっての転勤であった。

それまで自由に自分のやりたいことのできる環境で研究生活をしてきた私にとってここでの生活は何かと不自由で、やりたいことがなかなかできないことに強いストレスを感じるようになった。

私は母子ユニットでの仕事を纏めたいとの目標を立て、一般読者向けを含めて[102]、いくつか本にしたが[103,104]、思うように仕事は進まなかった。それでも雑誌「小児看護」(へるす出版）で連載（2009.1-2010.12）[105-123] を2年間させていただく機会を得て、一般読者にいかにわかりやすく書くか、随分と鍛えられた。これまでやったことのない企画本『「甘え」とアタッチメント―理論と臨床』[124] も経験した。この時期の仕事で、私の中には「甘え」を軸に関係病理を理解し、治療論を展開することに迷いはなくなったのではないか。

実はこの本の制作過程には裏話があった。もともとは臨床心理学領域ではよく知られていた「現代のエスプリ」(至文堂）からお誘いいただいた企画であった。原稿もすべて揃い、すでに座談会も終えていた。出版を心待ちにしていたところ突然出版社から「現代のエスプリ」が私たちの企画の前号で廃刊となることが告げられた。大変ショックを受けたが、企画内容そのものは他の出版社

に依頼してもよろしいとの許可をいただき、早速、遠見書房にお願いして日の目を見た。遠見書房さんには感謝しても仕切れない。幸いこの本はアタッチメントへの関心が高まりつつあった時流に乗ってそこそこ売れたので、編者としてはひと安心といったところであった。

Ⅶ. 西南学院大学時代（2012.4-2020.3）

大正大学で4年目を迎えて間も無く、私の出身高校である母校の大先輩から西南学院大学に来ないかとの誘いを受けた。思うような仕事も研究もできなくて悶々としていた私は、妻に相談し、すぐに二つ返事で決断した。まさか再び福岡に戻ることになろうとは夢にも思わなかったが、恩師のバックアップもあり、とても有り難いお誘いであった。

勝手知ったる福岡だったので、当時の知人も多く、私は久々に精神的ゆとりを取り戻した。

1．ライフワークの集大成

私は再び念願の母子ユニットでの仕事の総仕上げに取り掛かることにした。ただ、これはなかなかに手強い作業であった。何しろ膨大なデータ、それも母子ユニットで観察した母子の記録ビデオである。新奇場面法で観察記録した55組の母子を何度も何度も確認しながら、そこで母子のあいだに何が起こっているのかを記録に纏める作業の連続であった。でもさほど苦痛ではなく、母子ユニットで臨床を行っていた頃のことを思い出しながら、再び当時と同じような発見の連続で気分は高揚していた。

一冊の本に纏める際には、以前お願いしたことのあるミネルヴァ書房に引き受けていただいた。そして出来上がったのが『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』[125] である。

この本は私にとって二度目の学位論文のようなものだった。1994年から14年間続けた母子ユニットでの臨床研究の最初の成果であった。発達障碍の子どもの病態理解と治療を徹底して母子関係の相で捉えて纏めたものである。

その頃、私の臨床感覚に大きな変化が起こっていることに気づいていた。14

年間の母子ユニットでの臨床を離れて再び通常の臨床に戻ると、母子関係において立ち上がるこころ（情動）の動きが、患者治療者関係においても同様に生起することを実感するようになった。自分でもそれに驚かされるとともに「金の鉱脈を掘り当てた」という手応えを味わうようになり、次々に本を書き下ろした。

先の『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』は成因論として位置付けることができたが、それに続けて、生涯発達論として『甘えたくても甘えられない』[126]、治療論としての『あまのじゃくと精神療法』[127] と『発達障碍の精神療法』[128] の2冊を書き下ろした。前者は発達障碍以外の病態を主な対象に、後者は発達障碍に特化した治療論を展開した。私にとっては両者とも治療原理は全く同じであった。精神障碍の根っこは同じだとの思いがあったからである。

最後に仕上げたのが症状論（精神病理論）としての『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く ―関係発達精神病理学の提唱―』[129] である。乳幼児期に自閉症と診断された子どもの生涯発達過程で出現しうる多様な病態を、すべて自験例のみから余すところなく描出した。そこで明示したのは、発達障碍、神経症・心身症、行動障碍、精神病、人格障碍など、大半の精神病理の成り立ちに乳幼児期早期の関係病理が深く関与していることであった。これまで事例研究を大切にしてきたことが本書を纏める上で非常に役に立った。

以上5冊で私のライフワークは一応ケリがついた。当初は自閉症臨床研究として始めた仕事も、振り返ると、心の病そのものの成り立ちと治療を解明しようとしてきたのだということに気づかされた。

一息ついて間も無く、当時から精神科医療現場で「おとなの発達障碍」が大きな話題となっていて、現場が大混乱に陥っているように私の目には映った。一般精神科医向けに「おとなの発達障碍」を乳幼児期からの「発達」の「障碍」として解説した本を書かねばとの思いが強まった。そこで書き下ろしたのが『関係の病としてのおとなの発達障碍』[130] である。私の仕事には「甘え」理論（土居健郎）と強く共鳴するものがあったので、土居健郎の名著『「甘え」の構造』を出版した弘文堂にお願いして形にしてもらった。

これで私の母子ユニットでの臨床から始まった一連の研究の総決算は終えた。

2．臨床家養成のための感性教育

大正大学にいた頃から学生によく記録ビデオを供覧して教育に生かしていたが、西南学院大学に移ってから本格的に講義にきちんと位置付け、私の本を使って解説していくことを始めた。臨床教育では臨床実習が軸となる。実際の臨床経験を通して学ぶことこそ臨床教育だからである。しかし、大学、特に臨床心理学や社会福祉学の領域では本当の意味での臨床教育の歴史は浅く、大学での教育の大半は座学で専門知識の教授であった。私はこの現状に危機感を持っていた。医療や福祉の現場ではどう捉えて理解したらよいかわからず、対応に苦慮している事例が増加しているが、発達障碍の一言で片付けられている現状があったからである。これまでの精神医学の疾病論の枠組み自体があまり大きな力になっていないことがその背景にあった。

私には母子ユニットでの一連の研究を通して、次第に次のように考えるようになった。乳児期に母子間に生まれた根源的不安としての「甘え」のアンビヴァレンスは、子どもに強い不安と緊張をもたらすため、子どもはそれに対処すべく様々な反応を示す。それはこれまで精神医学で「症状」として捉えられてきたものである。そこでは症状が前景化し、アンビヴァレンスは背景化するため、臨床家は症状にとらわれやすいが、本来の治療では、背景化したアンビヴァレンスを掴みとることが求められ、そのためには「関係をみる」ことが必須である。情動の動きとしてのアンビヴァレンスを臨床家が掴み取るためにはどうしても感じ取るしか術はない。アンビヴァレンスという独特な情動の動きは誰もが体験的には理解できるものだと考えたからである。

このような考えに辿り着いたのは、母子ユニットで母子関係をみることを当然のように行ってきた私の臨床感覚の変化が大きかった。しかし、「関係をみる」ことは、「個をみる」ことを生業としてきた臨床家には非常に困難であることもよくわかった。そこで私は「個をみる」こととの相違を明確にしながら、「関係をみる」ことのできる臨床家を育てるためには感性に働きかけることが

殊の外重要であると考えるようになった。そこで始めたのが「感性教育」である。

その最初の成果は、まずは報告書を西南学院大学の研究叢書として出版した[131)]。それをベースにして本格的に感性教育の必要性を主張すべく『臨床家の感性を磨く』を誠信書房にお願いして出版することができた[132)]。

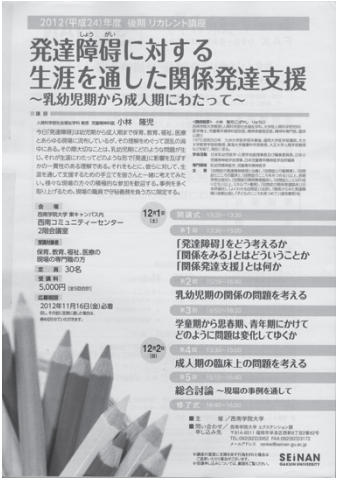
西南学院大学の学部と大学院の学生相手に感性教育を取り入れた講義を積み重ねていく中で、着実な手応えを得るようになった。私が特に嬉しく思ったのは、学生たちが講義の中で体験したことを誠実に素朴に感じるままに自由に語ってくれることであった。そこには私の予想を超えるほどの体験が述べられていた。これほど貴重な学生の生の声は記録に残すことが大切であると考え、この1、2年、次々と論文化した[133-140)]。

3．社会人向けのリカレント講座を毎年2回開催

何事でもそうだが、自分の思いを周囲の人々に語りかけ、その反応から学ぶ姿勢が大切だと考えている。その意味で私は西南学院大学に着任してすぐに社会連携課（当時エクステンション課）が運営している社会人向けのリカレント講座を知り、自分のやりたい企画を申し出た。着任後半年して始めたが、社会人からの反応は上々で、私自身学ぶことが多く、以来、半年に1回、8年間で計15回も開講してきた。他の講座の多くは1日90分毎週連続開催するという形を取っているが、私はスケジュール的にそれが難しかったため、2日連続あるいは1日完結5コマ（90分/コマ）というハードスケジュールで開講した（**図11**）。この形式で実施してよかった。遠方からの参加者には1回往復で済んだからである。集中講義形式の学習はとてもよいと日頃から思っていたので、この形で実施してよかった。参加希望者がなければ開催継続は不可能なので、最後まで開催できてほっとした。

4．臨床と哲学をつなぐ―人間科学におけるエヴィデンスとは何か

西南学院大学でのこれまでの成果を考える上で忘れてならないことがある。哲学者との学問的交流である。その出会いが生まれたのは、私が西南学院大学


2012（平成24）年度　後期 リカレント講座

発達障碍（しょうがい）に対する
生涯を通した関係発達支援
～乳幼児期から成人期にわたって～

講師　小林　隆児

今日発達障害は幼児期から成人期まで保育、教育、福祉、医療とあらゆる段階に浮べしている。その理解やかかって混乱の渦中にある。その際大切なことは、乳幼児期にどのような問題がなし、それが生涯にわたってどのような形で発達に影響を及ぼすかの一貫性のある理解である。それをもとに、個人に対して、生涯を通して支援するための手立てを皆さんと一緒に考えてみたい。様々な現場の方々の現場的な参加を歓迎する。事例を多く取り上げるため、現場の職員で特義務を含うたに限定する。

会　場
西南学院大学 博多キャンパス内
西南コミュニティーセンター
2階会議室

受講対象
保育、教育、福祉、医療の
現場の専門職の方

定　員　30名

受講料
5,000円（全日程分）

応募期限
2012年11月16日（金）必着

12月1日（土）
開講式　13:20～13:30
第1日　13:30～16:00
「発達障碍」をどう考えるか
「関係をみる」とはどういうことか
「関係発達支援」とは何か
第2日
乳幼児期の関係の問題を考える
第3日
学童期から思春期、青年期にかけて
どのように問題は変化してゆくか

12月2日（日）
第4日
成人期の臨床上の問題を考える
第5日
総合討論 ～現場の事例を通して
修了式　16:40～16:50

主　催／西南学院大学
問い合わせ／申し込み先　西南学院大学 エクステンション課
〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番62号
TEL.092(823)3962 FAX.092(823)3172
メールアドレス nrse@seinan-gu.ac.jp

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

図 11：初回のリカレント講座（2012.12.1-12.2）のちらし

に来た直後に開催することになった西南学院講座 in Tokyo のおかげである。

東京にいた頃、色々とやりたいことがあったが、全くできないことに悶々としていた。ところが西南学院大学に来て間も無く、東京の都心（東京駅隣りのサピアビル 10 階）に西南学院の東京オフィスが開設されるという話が私の耳に飛び込んできた。西南学院の活動を全国に発信するというのがねらいであった。私は常々温めていた企画をぜひとも実現したいと思い立ち、東京オフィスに相談したところすぐに受け入れてもらった。東京にいた時にはやりたくてもできなかったことが、東京から離れて福岡に戻った途端に実現できたわけで、人生の面白さを実感したものである。

以前から学問的交流のあった哲学者西研氏（東京医科大学教授）と著述家山竹伸二氏の協力のもと「哲学と臨床のあいだ」というテーマで講座を開催した。哲学者竹田青嗣氏（早稲田大学教授）、発達心理学者鯨岡峻氏（京都大学教授）、指定討論者として西氏と山竹氏、そして私で構成されたシンポジウムであった（**図 12**）。幸い好評を博した。その後も数回同様の企画を実施した。その成果を是非とも形にして残さねばとの思いから、新曜社に相談して西研氏と一緒に『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』[141] を編むことができた。名実とも

に学際的な本となった。対人援助実践を学び研究する上で必読書になってほしいとの願いを込めて作った本である。幸い多くの読者を得ることができてやってよかった。

図 12：西南学院講座 in Tokyo
「臨床と哲学のあいだ―人間科学の復興を目指して―」
（2013.9.7.）のポスター

私は哲学者らとの学問的交流を通して、「関係」をみることの核心を掴むことができた。それはフッサール現象学に触れたことに依る。フッサール現象学は独我論として敬遠されるところがあるが、人間は結局自らの主観を通してしか世界を掌握できないという限界を徹底して考え抜くことの重要性をそこで学んだ。ややもすれば、真実は自分という主観を超えた第三者の目、つまり客観の視点に立たないと得られないと考えられがちであるが、人間科学の世界では各自の内的体験をもとに徹底して自らの主観に問いかける姿勢が大切であることを学んだ。「感性教育」を推進する上で大きな心の支えとなった。

おわりに

振り返ると長いようでとても短く感じる五十年であった。こうしてみると、

私は常に自分がこれだと思いついたものにすぐに食い付いて取り組んだ人生だな、とつくづく思う。そのためか何かやり残したという後悔の念はほとんどない。各々のライフステージでしかやれないことがあると私は常々考えて実行してきたからであろうか。やりたいことをやり続けた教員・研究者生活だった。いつも多くの方々との出会いと協力のおかげだと痛感する。ありがたいの一言である。

特に西南学院大学に在籍した8年間は私にとってかけがえのないものであった。自分のライフワークを仕上げることができたし、教育の醍醐味も体験できた。そのおかげで今後の自分の取り組むべきテーマも決まった。本学の関係者の皆さんには心より感謝している。これからの残された人生、精神科臨床を続けることはもちろんだが、様々な現場で力を発揮できる臨床家養成に多少なりとも貢献したい。今の私の最大の願いである。

文献

1) 村田豊久ら（1975）．ボランティア活動による自閉症児の集団療法―6年目をむかえた土曜学級の経過―．児童精神医学とその近接領域，16，152-163.
2) 小林隆児・村田豊久（1977）．自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察．児童精神医学とその近接領域，18(4)，221-234.
3) 小林隆児（1979）．進学コースから脱落したある秀才児の軌跡．九州神経精神医学，25，236-241.
4) 小林隆児（2018）．臨床家にとっての初期体験の重み．そだちの科学，31，96-98.
5) 小林隆児（1982）．言語障害像からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察．児童精神医学とその近接領域，23(4)，235-260.
6) 小林隆児（1983）．年長自閉症児の認知障害とその精神病理学的特徴．（西園昌久編）青年期の精神病理と治療．pp.273-289．東京，金剛出版.
7) 小林隆児（1991）．自閉症児における自閉性と認知障害に関する研究（第2報）自閉症と精神遅滞との比較検討．安田生命社会事業団研究助成論文集1990年度（障害児療育関連分野），268(1)，45-53.
8) 小林隆児（1986）．働く自閉症者の生活様式の特性．精神科治療学，1(2)，205-213.
9) 小林隆児（1985）．自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究．精神神経学雑誌，87(8)，546-582.
10) Kobayashi, R. & Murata, T.（1986）. What is important for autistic adults to become independent or to be self-supported?. 11th International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions（Paris, France）

11）Kobayashi, R. & Murata, T.（1990）. Qu'est-ce qui est important pour que des autistes deviennent a l'age adulte independants ou capables de subvenir a leurs besoins?（C.Chiland and J. G. Young eds.）, L'enfant dans sa famille ―Novelles approches de la sante mentale de la naissance a l'adolescence pour l'enfant et sa famille―. pp.333-346. Paris, Presses Universitaires de France（PUF）.
12）小林隆児（1986）．自閉症児は思春期をいかに乗り越えるか．福岡大学医学紀要，13（3），275-286.
13）小林隆児（1987）．学童期と思春期の問題-思春期をいかに乗り越えて社会的自立を獲得していくか-．（山崎晃資・栗田　広編）自閉症の研究と展望．pp.53-74．東京，東京大学出版会.
14）小林隆児（1985）．24 歳の 1 自閉症者の精神病的破綻．児童青年精神医学とその近接領域，26（5）,316-327.
15）小林隆児・岡村克巳（1990）．成人期自閉症の運動技能と社会的技能における基本障害．発達の心理学と医学，1（3），367-377.
16）藤川英昭・小林隆児・村田豊久・古賀靖彦（1987）．大学入学後に精神病的破綻をきたし抑うつ自殺企図まで示した 19 歳の Asperger 症候群の 1 例．児童青年精神医学とその近接領域，28（4），217-225.
17）小林隆児（1988）．Tourette 症候群と円形脱毛を呈した小児自閉症の 1 例―精神発達と症状発現との関連について―．精神科治療学，3(1)，105-109.
18）小林隆児・高原朗子（1999）．Tourette 症候群と円形脱毛を呈した自閉症児のその後を考える．精神科治療学，14(1)，85-88.
19）小林隆児（1989）．消化性潰瘍を呈した年長自閉症の 1 例．精神科治療学，4(2)，213-219.
20）小林隆児・井上登生・村田豊久（1989）．小児自閉症に併発する心身症．発達障害研究，11(1)，32-37.
21）小林隆児・村田豊久（1989）．自閉症と感情障害―抑うつと軽躁状態を繰り返した年長自閉症の 1 例―．精神医学，31(3)，237-245.
22）小林隆児（1992）．発達障害と感情障害．精神科治療学，7(9)，961-965.
23）小林隆児（1992）．ある成人期自閉症者の強迫症状と家族病理．精神医学，34(4)，365-371.
24）小林隆児・大嶋美登子・金子進之助（1992）．成人期の女性自閉症者にみられた摂食障害に関する発達精神病理学的考察―自閉症の対象関係の発達病理に焦点を当てて―．児童青年精神医学とその近接領域，33(4)，311-320.
25）小林隆児（1991）．青年期・成人期の自閉症―青年期の病像と成長像―．こころの科学，37，50-57.
26）小林隆児（1995）．自閉症の青年期発達と精神療法について．精神療法，21(4)，333-339.
27）小林隆児（1991）．青年期自閉症の精神性的発達について．児童青年精神医学とその近接領域，32(3)，205-217.
28）小林隆児（1994）．障害児者にみられる“性”に関する問題．発達障害医学の進歩，

6，60-67.
29）Kobayashi, R.（1996）. Psychosexual Development of Autistic Children during Adolescence.（Shimizu, M. ed.）, *Recent Progress in Child and Adolescent Psychiatry*, pp.12-20, Springer-Verlag, Tokyo.
30）小林隆児・今地智子（1981）．前思春期における抑うつの意味―小児うつ病の前思春期発症例を通して―．児童精神医学とその近接領域，22(2)，113-124.
31）Ushijima, S. & Kobayashi, R.（1988）. The perimenarche syndrome: A proposal. Japanese Journal of Psychiatry and Neurology, 42(2), 209-216.
32）小林隆児・牛島定信（1989）．前思春期発達をめぐる母親の葛藤―摂食障害の治療を通じて―．家族療法研究，6(1)，11-18.
33）小林隆児・牛島定信（1989）．ある女性アイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した11歳の女児の1例―前思春期の情緒発達に焦点を当てて―．精神科治療学，4(10)，1295-1302.
34）小林隆児（1989）．母子相互作用における世代間伝達-11歳男児の抜毛癖の家族療法より-．小児の精神と神経，29（4），245-252.
35）小林隆児（1991）．前思春期にみられる摂食障害とその近縁の病態．小児の精神と神経，31(1)，19-26.
36）小林隆児・皿田洋子（1992）．強迫現象とその回復過程からみた前思春期発達．児童青年精神医学とその近接領域，33(2)，163-176.
37）小林隆児（1993）．前思春期発達とそれを支える家族の機能―男児と女児の比較検討―．家族療法研究，10(1)，11-18.
38）小林隆児（1993）．前思春期発達とそれを支える家族の機能―男児と女児の比較検討―．家族療法研究，10(1)，11-18.
39）小林隆児・井上登生（1997）．前思春期発症の身体化障害の1例．（成田善弘・若林慎一郎編）思春期青年期ケース研究6. 身体化障害―思春期の心とからだ，pp. 27-42，東京，岩崎学術出版社.
40）小林隆児（1996）．前思春期の情緒発達とその障害に関する臨床的研究．平成7年度メンタルヘルス岡本記念財団助成報告集，8，57-60.
41）小林隆児（2005）．子どもの情緒発達とこころの臨床―学童期・前思春期の視点から―．そだちの科学，4，55-64.
42）小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進・吉永一彦・西園昌久（1982）．福間病院の25年間における入院患者統計　第一報　全入院患者の動態. 九州神経精神医学, 28 (3, 4)，337-352.
43）小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進・吉永一彦・西園昌久（1983）．福間病院の25年間における入院患者統計　第二報　精神分裂病入院患者の動態．九州神経精神医学，29，(1)，116-125.
44）小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進・吉永一彦・西園昌久（1983）．福間病院の25年間における入院患者統計　第三報　在院患者の動態．九州神経精神医学，29(1)，126-132.
45）小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進・吉永一彦・西園昌久（1984）．精神分裂病の

入院治療の時代的変遷．社会精神医学，7(2)，130-141.
46）小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進・吉永一彦・西園昌久（1984）．精神分裂病の入院治療とアフタケアの時代的変遷―精神科初回入院治療例の再入院の防止に焦点を当てて．精神医学，26(12)，1269-1279.
47）Kobayashi, R., Umeda, Y., Sasaki, Y., Yoshinaga, K., Nishizono. M.（1984）. Chronological changes in the hospitalization and in the aftercare of schizophrenic patients in Japan. Proceedings of 10th World Congress of Social Psychiatry.
48）小林隆児・村田豊久（1990）．201 例の自閉症児追跡調査結果からみた青年期・成人期自閉症の問題．発達の心理学と医学，1(4)，523-537.
49）Kobayashi, R., Murata, T. & Yoshinaga, K.（1992）. A follow-up study of 201 children with autism in Kyushu and Yamaguchi Areas, Japan. Journal of Autism and Developmental Disorders, 22(3), 395-411.
50）小林隆児（1993）．自閉症にみられる折れ線現象と長期予後について．児童青年精神医学とその近接領域，34(3)，239-248.
51）小林隆児（1993）．自閉症児に対する教育的処遇と長期予後―201 例の自閉症児追跡調査結果から―．小児の精神と神経，33(2)，155-162.
52）Kobayashi, R. & Murata, T.（1998）. Behavioral characteristics of 187 young adults with autism. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 52(4), 383-390.
53）Kobayashi, R. & Murata, T.（1998）. Setback phenomenon in autism and long-term prognosis. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 98(4), 296-303.
54）小林隆児（1993）. 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理. 精神科治療学，8(3)，305-313.
55）小林隆児（1993）．自閉症における「知覚変容現象」の現象学的研究．精神医学，35(8)，804-811.
56）小林隆児（1997）．青年期にみられる知覚変容現象とその治療的意義.（中根 晃・市川宏伸・内山登紀夫編）自閉症治療スペクトラム―臨床家のためのガイドライン，pp.136-147，東京，金剛出版.
57）小林隆児（1994）．自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚―情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義―．精神医学，36(8)，829-836.
58）小林隆児（1995）．自閉症にみられる妄想形成とそのメカニズムについて．児童青年精神医学とその近接領域，36(3)，205-222.
59）Kobayashi, R.（1996）. Physiognomic perception in autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 26(6), 661-667.
60）Kobayashi, R.（1998）. Perception metamorphosis phenomenon in autism. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*. 52(6), 611-620.
61）Kobayashi, R.（1999）. Physiognomic perception, vitality affect and delusional perception in autism. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 53(5), 549-555.
62）小林隆児（1999）．自閉症の知覚様態と症状形成に関する行動分析的研究．平成 8 年度～ 10 年度科学研究費補助金（基盤研究 C2）研究成果報告書.
63）小林隆児（2003）．広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的

検討．精神神経学雑誌，101(8)，1045-1062.
64）小林隆児（2010）．メタファーと精神療法．精神療法，36(4)；517-526.
65）小林隆児（2011）．関係からみた「勘と勘繰りと妄想」（土居健郎）．精神療法, 37(3)；327-336.
66）小林隆児（2012）．「甘え」（土居）と“vitality affects”（Stern）―「甘え」理論はなぜ批判や誤解を生みやすいか．精神分析研究，56(2)；134-144.
67）小林隆児（2017）．自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く ―関係発達精神病理学の提唱―．京都，ミネルヴァ書房.
68）小林隆児（1996）．自閉症の情動的コミュニケーションに対する治療的介入―関係性の障害の視点から―．児童青年精神医学とその近接領域，37(4)，319-330.
69）小林隆児（1994）．自閉症の早期治療に関する研究（その 1）自閉症の発達精神病理からみた情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義について．平成 5 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費報告書，31-36.
70）小林隆児・利光恵（1995）．自閉症の早期治療に関する研究（その 2）関係性の障害の視点からのアプローチ．平成 6 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集（2 年度・初年度班）．443.
71）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・田中智子（1996）．自閉症の早期治療に関する研究（その 3）．平成 7 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集．pp.63-70，国立精神・神経センター.
72）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香・木村正志（1997）．発達障害における情動的コミュニケーションに関する臨床的研究．平成 8 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集（2 年度・初年度班），pp.618，国立精神・神経センター.
73）小林隆児・白石雅一（1998）．自閉症の情動的コミュニケーションにおける音声分析学的研究―情動の変容と言語認知機能の獲得の関連性に焦点を当てて―．文部省科学研究費重点領域研究「心の発達」平成 9 年度報告書，pp.300-309.
74）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1998）．自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと言語認知発達に関する研究―情動、認知、言語の関連性に焦点を当てて―．平成 9 年度厚生省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集（2 年度・初年度班），国立精神・神経センター，p.486.
75）小林隆児・財部盛久・石垣ちぐさ・竹之下由香・中澄襟子・白石雅一（1999）．乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと言語認知発達に関する臨床的研究．（主任研究者：栗田広）厚生省精神・神経疾患研究委託費（8 公-3）乳幼児期から思春期の行動・情緒及び心理的発達障害の病態と治療に関する研究．平成 10 年度研究報告書，pp.41-47.
76）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1997）．自閉症におけるコミュニケーションの進展過程に関する臨床的研究―情動的コミュニケーションの進展過程を中心に―．平成 8 年度（1996 年度）安田生命社会事業団研究助成論文集，32，27-37.
77）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1998）母親―乳幼児

精神療法からみた母子の関係性の病理と世代間伝達 . 1998 年度メンタルヘルス岡本記念財団助成報告集，10，73-77.
78）小林隆児（1999）．乳幼児期早期の母子コミュニケーションの質的評価とありかたに関する研究．（研究代表者：中野仁雄）平成 10 年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書（第 1/6），pp.46-53，厚生省.
79）小林隆児（2000）．乳幼児期早期の母子コミュニケーションの質的評価とありかたに関する研究（その 2）母子コミュニケーションの成立を左右する要因に関する検討．（研究代表者：中野仁雄）平成 11 年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書（第 1/6），pp.58-60，厚生省.
80）小林隆児（2001）．乳幼児期早期の母子コミュニケーションの質的評価とありかたに関する研究（その 3）．平成 12 年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書（第 1/6）.
81）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1997）．乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象．乳幼児医学・心理学研究，6，9-27.
82）小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1997）．東海大学健康科学部における Mother-Infant Unit の活動紹介．乳幼児医学・心理学研究，6，31-43.
83）Kobayashi, R.（2001）. Duality of function of language in communication with people with autism. Richer, J. & Coates, S.（Eds.）, *Autism: The search for coherence*. pp.220-227, Jessica Kingsley; London.
84）Kobayashi, R.（2000）. Affective communication of infants with autistic spectrum disorders and internal representation of their mothers. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 54（2）, 235-243.
85）Kobayashi, R., Takenoshita, Y., Kobayashi, H., Funaba, K., Kamijo, T., Takarabe, M.（2001）. Early intervention for infants with autistic spectrum disorders in Japan. *Pediatrics International*, 3（2）, 202-208.
86）小林隆児・船場久仁美・北野庸子・内藤明・小林広美・板垣里美・竹之下由香（2002）．人工内耳を装用した幼児にみられる母子コミュニケーション．東海大学健康科学紀要，7（1），9-16.
87）小林隆児・竹之下由香・船場久仁美・小林広美・板垣里美（2002）．自閉症にみられる自傷の成因と治療をめぐって．精神科治療学，17（8），1025-1031.
89）小林隆児（2004）．乳幼児期の母子コミュニケーションからみた両義性と両価性．（藤岡淳子・小西聖子・田中康雄・小林隆児ら著），少年非行―青少年の問題行動を考える―．pp.41-61, 東京，星和書店.
90）小林隆児・井上玲子・稲岡勲（2007）．高機能広汎性発達障碍のリスクをもつ 1 歳男児に現れた原初的身振りの意味の検討．児童青年精神医学とその近接領域，48（3）；353-369.
91）小林隆児（1999）．自閉症の発達精神病理と治療．東京，岩崎学術出版社.
92）小林隆児（2000）．自閉症の関係障害臨床―母と子のあいだを治療する―．京都，

ミネルヴァ書房.
93）小林隆児（2004）．自閉症とことばの成り立ち―関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界―．京都，ミネルヴァ書房.
94）小林隆児（1998）．強度行動障害にみられる関係性の病理と家族への治療介入．厚生省心身障害研究平成 9 年度報告書「障害児（者）の治療教育法の開発に関する研究」(主任研究者石井哲夫)，35-42.
95）小林隆児（1998）．強度行動障害における心理社会的要因と療育援助の方法に関する研究．富士記念財団助成研究報告書.
96）小林隆児（1999）．自閉症圏障害の生涯発達とその発達援助方法の開発に関する研究（その 1）．第 29 回三菱財団事業報告書平成 10 年度，pp.378-379.
97）小林隆児（2000）．自閉症圏障害の生涯発達とその発達援助方法の開発に関する研究（その 2）．第 30 回三菱財団事業報告書平成 11 年度，pp.412-413.
98）基盤研究（C）(2）課題番号（14591004)「広汎性発達障害にみられる逸脱行動に関する臨床的研究」(2002-2003)
99）小林隆児（2001）．自閉症と行動障害―関係障害臨床からの接近―．東京，岩崎学術出版社.
100）小林隆児・原田理歩（2008）．自閉症とこころの臨床―行動の「障碍」から行動による「表現」へ―．東京，岩崎学術出版社.
101）小林隆児・鯨岡峻（編著）(2005)．自閉症の関係発達臨床．東京，日本評論社.
102）小林隆児（2008）．よくわかる自閉症―「関係発達」からのアプローチ．法研.
103）小林隆児（2010）．自閉症のこころをみつめる―関係発達臨床からみた親子のそだち―．東京，岩崎学術出版社.
104）小林隆児（2010）．関係からみた発達障碍．東京，金剛出版.
105）小林隆児（2009）．連載「関係からみた子どものこころと育ち」(第 01 回）ある医療現場の相談事例から感じたこと．小児看護 32(1)；98-99.
106）小林隆児（2009）．（第 02 回）甘えたくても甘えられない子どもたち．小児看護 32(2)；246-248.
107）小林隆児（2009）．（第 03 回）今の親子関係は過去の親子関係を映し出す．小児看護 32(3)；374-377.
108）小林隆児（2009）．（第 04 回）関係からみた発達障碍．小児看護 32(4)；504-506.
109）小林隆児（2009）．（第 05 回）養育者は子どものこころを映し出す鏡．小児看護 32(6)；784-787.
110）小林隆児（2009）．（第 06 回）母親の被虐待体験が今の母子関係に影を落とす．小児看護 32(9)；1268-1272.
111）小林隆児（2009）．（第 07 回）母親にみられる育児不安の背景にあるもの．小児看護 32(10)；1398-1401.
112）小林隆児（2009）．（第 08 回）前思春期の女児にみられる抑うつと甘えのアンビバレンス．小児看護 32(11)；1522-1526.
113）小林隆児（2009）．（第 09 回）母子関係の回復過程にみられる母親の不安．小児看護 32(12)；1660-1664.

114）小林隆児（2009）．（第 10 回）学童期統合失調症にみられる甘えとアンビバレンス．小児看護 32(13)；1806-1810.
115）小林隆児（2010）．（第 11 回）甘えてくる子を思わず遊びに誘う母親．小児看護 33(1)；123-127.
116）小林隆児（2010）．（第 12 回）前思春期の女児にみられる拒食と甘えのアンビバレンス．小児看護 33(2)；233-237.
117）小林隆児（2010）．（第 13 回）成人期自閉症者にみられる醜貌恐怖の背景にあるもの．小児看護 33(3)；395-399.
118）小林隆児（2009）．（第 08 回）前思春期の女児にみられる抑うつと甘えのアンビバレンス．小児看護 32(11)；1522-1526.
119）小林隆児（2010）．（第 12 回）前思春期の女児にみられる拒食と甘えのアンビバレンス．小児看護 33(2)；233-237.
120）小林隆児（2010）．（第 14 回）抜毛癖の前思春期男児にみられる母子間の世代間伝達．小児看護 33(4)；537-541.
121）小林隆児（2010）．（第 19 回）痴漢被害後に PTSD を呈した前思春期女児の回復過程．小児看護 33(11)；1575-1579.
122）小林隆児（2010）．（第 20 回）初回面接でとらえられる「甘え」のアンビバレンス．小児看護 33(12)；1712-1716.
123）小林隆児（2010）．（第 21 回）成人にみられる「甘え」のアンビバレンスさまざま．小児看護 33(13)；1858-1862.
124）小林隆児・遠藤利彦（編）(2012)．「甘え」とアタッチメント―理論と臨床―．東京，遠見書房.
125）小林隆児（2014）．「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム―「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて―．京都，ミネルヴァ書房.
126）小林隆児（2014）．甘えたくても甘えられない―母子関係のゆくえ、発達障碍のいま―．東京，河出書房新社.
127）小林隆児（2015）．あまのじゃくと精神療法―「甘え」理論と関係の病理―．東京，弘文堂.
128）小林隆児（2016）．発達障碍の精神療法――あまのじゃくと関係発達臨床．京都，創元社.
129）小林隆児（2017）．自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く―関係発達精神病理学の提唱―．京都，ミネルヴァ書房.
130）小林隆児（2018）．関係の病としてのおとなの発達障碍．東京，弘文堂.
131）小林隆児（2017）．臨床力を高めるための感性教育（研究叢書 No.42）．西南学院大学学術研究所.
132）小林隆児（2017）．臨床家の感性を磨く―関係をみるということ．誠信書房.
133）小林隆児（2018）．なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか―「感性教育」の新たな試み―．西南学院大学人間科学論集，14(1)；279-318.
134）小林隆児（2018）．常識 common sense を疑い、共通感覚 sensus communis を呼び

醒ます―「感性教育」の目指すもの―．西南学院大学付属臨床心理センター紀要，創刊号，2-7.
135）小林隆児（2018）．なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか．西南学院大学人間科学論集，13(2)；215-243.
136）小林隆児（2019）．大学新入生を対象としたアクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」の試み．西南学院大学人間科学論集，14(2)；161-217.
137）小林隆児（2019）．なぜ「感性教育」は学生の人格発達を促すのか．西南学院大学人間科学論集，15(1)；145-180.
138）小林隆児（2019）．アクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」は学生にとってどのような学びの体験か．西南学院大学人間科学論集，15(1)；181-225.
139）小林隆児（2019）．感性教育は人間教育に通じる―臨床教育についてつれづれに思うこと―．西南学院大学付属臨床心理センター紀要，2号，3-12.
140）小林隆児（2020）．感性教育と精神医学教育．西南学院大学人間科学論集，15(2)；119-164.
141）小林隆児・西研（編）(2015)．人間科学におけるエヴィデンスとは何か―現象学と実践をつなぐ―．東京，新曜社.

西南学院大学人間科学部社会福祉学科